産むようプレッシャーをかけることがあります。老後のために結婚し子どもを産むのでしょうか。少子化の現在、親の老後を子どもに頼るのは双方にとって負担が重いものです。もし結婚して、子どもを産み育てたとしても、成長した子どもはいずれ家を出て独立します。元気なうちは夫婦二人で暮らしますが、いつしか歳をとり、どちらか独りになると、再び同居の話が持ち上がります。その場合の多くは、高齢者が今まで築いてきた地域の関係、ネットワークから根こそぎにされて、子世代の生活環境に入っていくことになります。これを中途同居といいます。高齢者の幸福度調査ではシングルを選んだ人より、中途同居の人のほうが幸福感が低いといわれています。

中途で家族との同居を開始しても、いずれ要介護になれば、施設に入所することになるかも知れません。その入所は自ら選択した入所でしょうか。家族介護の負担は重く、施設入所を選択する家族の気持ちもわからないではありません。中途同居だとすれば、築いたネットワークを置き去りにして同居したにもかかわらず、やむを得ず、施設入所を家族が選択することになります。家に帰りたいと思っても家族の居る家には帰れない。それが自分ひとりの家だとしたらどうでしょう。誰も帰ることを拒む人はいません。自分の家に帰ることができたとして、その先何が必要なのでしょうか。困った時に助けてを言える支え合えるネットワーク、選択できる介護サービスなど、安心できる地域介護資源があれば、ひとりでも自分の家で安心して老いていくことができます。

おひとりさまで生きている人は多くなりました。おひとりさま、またいずれおひとりさまになるであろうおひとりさま予備軍の人たちが「おひとりさまでOK！」といえる環境整備をすすめていきましょう。西東京市がそういう地域資源の大きなところだといいですね。

特集 第7回西東京市男女

「おひとりさま」の「おひとり様

プロフィール

上野 千鶴子　東京大学大学院教授

- 1948年富山県生まれ。京都大学大学院社会学博士課程修了、平安女学院短期大学助教授、シカゴ大学人類学部客員研究員、京都精華大学助教授、国際日本文化研究センター客員助教授、ボン大学客員教授、コロンビア大学客員教授、メキシコ大学院大学客員教授等を経る。
- 1993年東京大学文学部助教授（社会学）、1995年東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は女性学、ジェンダー研究。この分野のパイオニアであり、指導的な理論家のひとり。近年は高齢者の介護問題に関わっている。
- 1994年『近代家族の成立と終焉』（岩波書店）でサントリー学芸賞を受賞。『上野千鶴子が文学を社会学する』（朝日新聞社）、『差異の政治学』『当事者主権』（中西正司と共著）（岩波書店）、『家族を容れるハコ　家族を超えるハコ』（平凡社）、『老いる準備』（学陽書房）など著書多数。新刊に『おひとりさまの老後』（法研）。